大和行日記

單

E26
44

文政元年戊寅

茶山遺稿　大和行日記　　西備新聞社編　活字本

戊寅、、三月六日いそぎて門を出づ、、陽谷の墓に
参る、、同行牧周蔵、林新九郎、臼杵直記、
渡辺鐵蔵と余と五人なり、、郷人別所有俊
こゝ出會ひ、終に同じくす、、井原の龍蔵兄弟、
庫右衛門、玄冲、寛平五人出迎、郡より今市まで
送り来る、、矢掛につき石井源助に宿す
儒医　山名永策来る

東京帝國大學圖書之印
B 23475

七日晴石井源治郎兄弟山名彩策父子三風
とゆふ迄送り来る、河邉駅にて大月虎蔵
が疚を問ふに、し山手の宿にて守安慎輔
人と来らしめて立よれよとニふ中途に高杉禎輔
ついて慎輔出迎へ、、宮内にて竹生とともらひ
武本渓登々庵の許と聞くき、、御岡山藥師
院にとまる詩を留めて腐原諸人に呈す
八日香登にて名田定五郎しをたつぬ、其子某
に托して赤石退蔵にふみをやり三ッ石まて来ら
んとゆふ、三ッ石駅に宿し、、武本立平に逢

ふ欲、逆旅主人横屋伊右衛門、立平は登
々か弟なり
九日、播州西構にて俶立をともらひ、、姫
路に宿す
十日加古川にて高橋伊谷川西屋友七を尋んと
すゝ、ともはすして過く、、大久保にとまる
十一日兵庫にて播佐五郎か宿に人をよせ、、
西宮につく、、福山の人近藤屋なとにあふ
十二日尾崎にて別府有俊追ひ来りにあふ、、
大坂にいたる、名屋敷に著し御屋敷へは直

はとやら岡部長之助来り訪ふ、、、兎堂後田原
元戎、別所有俊、岩田屋幸七、河内屋儀助、
讃岐の牧熊太郎来、、、郷人佐藤謙助遊
ふて来る
十三日浪花にあり米沢人金子孫右衛乃、但馬
の櫻井数徑もたまゝ同宿して出見る、、、午
前、、、園部長之助にて留飲す、、、讃岐人門
部謙十郎同しき春亭来り酒をあくむ、、、
篠崎武内（此字了疑）、、、紀国屋六平来り、、、
六平は天満に住すは饋新川人にて快男子也

高知堂製

△市嗟き △よのにたなし

十四日、、、佐藤謙助も同しく浪花を出、鐵蔵一
人とゝまる、、、△竹内柳蔵ともゝに宿す、高 十五日△
勝院といふ山伏の宅に宿す
十六日、、、保平宮地太郎に街上に逢ふ、、、保宮両人
余か宿に来り宿す（いせの人鷲塚玉か同宿也と
いふ）、、、花亭主人はすくれたるすき人なれは
実にゆかしくて、、、
十七日、、、よそのをとりへ周蔵新九郎一日午
本よりわかれていせに行保平宮地太郎謙助
土田よりわかれて高野にゆく、、、午後服

部宗侃とこし村に訪ふ京人吉田意専坐
にあり宗侃か医の師也とりふゝ祖母を出
て見るゝ宗賢かんがちゝ宗賢は良医也
ゝゝゝ
十八日ゝ丹波市にとまるゝこの月福山の人近
藤屋なとにあふゝゝ
十九日ゝ南都にて滝長蔵と尋てゝ岩池に
宿す
廿日ゝ巨椋にあふゝ京に入るゝ升屋にいたり
宿す

高知堂製

廿一日さぬきの漆谷老人か僑居を訪ひゝ次に
中山寺備、次に城後や太兵衛、佐や善右衛門を
たつぬゝ烏部山にいたり和田先生及ひ亡弟の
墓に詣つ
廿二日
廿三日ゝ高階官医の子某、山田の人某等きたり
見るみ吉村瀬か徒也し漆谷と節ふ阿人某
讃人阿部良平坐にありゝ別所有俊、吉岡仙
卿来
廿四日 出石の士人井上貞吉、今井良五郎来

廿五日、、升屋のかけやしき寺町六角下る所に
うつるとし金山章左衛門来り、、俳諧師金升屋
へ同来り、、又齋藤勝九郎来る金山は津
和野有藤は白川の用達の人也今枝榮顕
来る栗山の弟子にて故人也、、数亭来話、、
里村玄碩来り尋ね、、
廿六日南豊を訪ふ、、古画岡見、、南巡盛典、、、
表屋升やを訪ひ帰る豊彦はるす也、、松本愛
山に値ふ、、言倫来り語る月渓か江戸人にて京
住印刻をよくすといふ

廿七日月渓又来り江戸柏木如亭伴ふ、、言倫
、、横巻を示す湊谷来るおなじく来る、、村上左
多尉有友小平を訪ひ立る、、俵屋宗岳翁か拓
飲におもむき おきくか箏をきく表や宇兵衛か
後家紙をとめくる石州の人葉に遇ふ、、南豊来
り談す
廿八日高友小草訪はる蔵鋪の書生植田敬三来
畑氏に寓居す柄翁の書を供して湊谷老人所蔵
の書画をみんことをもとむ、、いよ人矢野兼次来
る余をみ送に訪ふ返てここに来る也言倫と同じく

登々庵を喪ふと平九郎主と拝す
廿九日柳辺春植吉倫を伴として来見し帰るをぬく
山阿部蔵平四月望の会詩をいす也ゝ照太郎
同藩と同しく春を東山に織しゝ今村栄顕来訪
すゝ吉竹小兵衛来りゝ小兵衛は年か廿五歳
前木屋町に寓せし時隣家に在し角倉役人大原
九八郎の子也今吉竹の養子となり東洞院の組
になり子に家をゆつりて隠居す子は十九なる船に
のりし堀にて壹岐嶋の土居とりふなの子存亭と
善し者とよむと云ゝこの小兵衛の母は対馬嶋の

高知堂製

人めと対馬侯の息女縁に階し来り京にて帰る
と語しゝを記す前縁をゝ子ゝ小兵衛余かこゝに
あるを知り尋きたりて来る小兵衛か妻はわきく
小筝の弟子なりしと云
四月朔日如小路大学介来ゝ保平有信来つらし
ま三宅章吉来ゝ照太郎中嶋文吉をつれ来文吉
は名高才子文才は人久太郎に比す備前岡元
平太郎来ゝ浪花人玉田某門人某来村上太兵衛
つゝめぐ也ゝ漆谷良山を訪ふゝ吉倫諸子と妻如
来の野花をときゝにゆく

二日 保平と藤浪家の猿楽をみんと約す。ゝ浅井
章女来り、せめ山に角太夫佐渡吉太夫が常を違
すよ吉太夫絶句を守すさみきの名所西七来りし
湊翁老人言伸来る兵庫の福佐五郎一雛僧とつれ
来る。ゝ保平定太郎および座成右衛門来る。ゝ浅井
章女伊勢の吉太夫に託せられしを。ゝ恵山。ゝ南
堂すゐり。ゝ
三日 湊翁悠居堂。ゝ参河の昌光寺出来。ゝくら敷
の人小野小左衛門江戸より帰り石田縫助が書を達し
鉢植の梅をおつさへ来る 四年前江戸にありし時

白川公の招に参りみづから園の梅一枝を折り歌そへて
賜りしを石田に托しておきしをとゞけし也 小野
西三日に国へ下るべきなれば 梅はもち帰りて余の
家に送らむといへども旧知の人にもあらねばまし
て京まで百三十里もち来りしと又七十里の労を
かけむも心やすからされは受取て旅舘の庭に
おく 松風館主人大坂より来る。ゝ里村玄碩の茗
讌に赴く言倫と同じくす 坐に佐治の人清水平八
丸山主水あり 丸山名は応震応挙の孫也
四日 小野小左衛門が宿高倉四條下るみのやをとひ。ゝ

名ちこや俵屋二家芳田月渓等をたづね〻〻丸山佐
阿弥にてさぬきの阿部良平が諸子と会するに赴
く奥道乙、柴田義、さつまの伊智地藤右衛門、
備中くらしき井筒や其、其外廿人許〻〻故人〻〻畑
柳泰、ふしみの藤村次郎八、伊勢の何遠太右衛門、
豊後の太合上人等也 次郎八と巨椋の月見とと
もにせし人なり 二十餘歳既茫々 廿日何園会一堂
詠超回遊悲且喜 八人同居五人亡〻〻里村へ礼にゆ
き柏木如亭が備居をとふらふ〻〻熊太郎が妻
其姉にあふ〻〻岡村豊彦来る

高知堂製

五日 井上勇吉来 升尾崇七来飲し〻〻南豊書画人夜
潮裔 さつまの伊智地藤右衛門来る〻〻伊遠太右衛門来
りあひて〻〻
六日 鉄蔵大坂より来る 和泉屋次兵衛なるもの〻〻めぐみ〻〻
備前片岡形輔来り〻〻めぐむ 小野小右衛門 粒浦の
小川嘉兵衛 連嶋の童右衛門 藤村次郎八来る〻〻
周蔵と同じく漆谷と訪ふ〻〻矢野〻〻
七日〻〻周蔵折九郎〻〻寛斎にゆき 鉄蔵小野にゆく 升
屋穐七備前にゆくとて来りわかる 淡州人柏木 孫七郎来る
〻〻〻

八日周藏新九郎比叡山にのほり松風生人鐵藏大阪に
かへる謙介風郭にて別す小野小左衛門来り、言倫
三七来り、滌谷老人来り、玉堂琴人来、兆年
の三縁寺、（伝尾の旦那寺也）
九日畑氏の招に赴く、浅井浦上今枝小川渉を訪ふ滌谷
老人も、畑氏へ来り会す、山路敬三至り来る
十日滌谷、来れよとて小郎ゆきて、梅辻春樵来村岡
某中山と介として来り見る佐渡士人口日太郎来
十一日去竹か偶居とたつね赤穂人に逢ふ伊勢四日市
人堀木茂右衛門来、言倫氏と三本木にゆき、梅辻春

樵滌谷等を訪ふ、斎藤小平向来、村上、
十二日大含上人来り、南豊来る、伊勢堀木茂右衛
門、言倫南豊を招く、林太郎来り、林太は林
太三郎とて不吉祥也
十三日大含、送詩を乞ふ、雲窓によす麻布の光
明寺住持也、横山掛眠、出雲の官医にて京住
の人也、三宅又太郎梅作至りにあふ、旭荘変、
南豊、村上氏、畑勘解由、
十四日太右衛門周藏と同しく高尾にゆき、何遺眠う
すく、廿五年前嵯峨に六如上人ありし時こゝをたびく

過くゝ畑柳原横山柳廐 長崎の名村進八とはる
阿部良平はゝ来りたわらや安芸那ゝゝ廣嶋西
福院来りゝゝ
十五日名村進八か備后を尋ゝゝ主人神代某出て見
るゝ備中つらしま倉敷ゝ西あま丸川某等来り
ゝゝ神代はゝ長崎人なり
十六日次郎八来り日野公へ参りられよとゝ也ゝゝ
大含上人ゝゝ太本出来りゝゝ 村上玄俊 横山柳廐来
話すゝゝ言備漆谷と同じく名村進八を以て阿蘭
陀人と見るゝ傍にありし伯耆生ゝ同蔵直江ゝゝ

十七日荷藤小平ゝゝ井上塑吉ゝゝ名村進八ゝ清
水平八清中嶋文吉等在りゝゝ清岡菅公いらせらる
公名は長親三位式部大輔也ゝゝ侍するもの竹洞、
玉堂、春琴ゝゝ余、漆谷ゝゝ
十八日さわきの意戒来りゝゝ大含か出来りてゝゝ羽州
米澤の士津田才助同酒井家の侍鈴木千蔵、四年
前江戸の寓へ尋来りし羽州山形の藩士鈴木良右
衛門かきとゐてゝ来りて見るゝゝ次郎八と同じく轉
奏日野大納言公の邸に赴くゝゝ 南豊来る
十九日旭居出てきたる浮路の半仙と云人来りゝゝ

那波鉄之介〻上京せし〻〻升屋宗七〻〻吉田宗右衛門
（江戸岸本由平の弟子也）といへるが書を乞と云〻〻謙
卿数日逗とゞまれるも〻〻さぬきの会田時蔵きたる〻〻
大含上人を誘ふて〻〻一寺に入る寺主は肥後の人
名は佐海 号紀の川の役也と云〻〻言倫氏の招に赴
むく〻〻南豊に遇る〻〻言倫氏の所に北野大学助、薩
摩の伊稲地藤右衛門 南豊〻漆器等也〻〻伊稲地とし
廿蔵〻〻
廿日 意誠きたる〻〻其の楊村謙蔵の書あり〻〻筑
前の桃永鍋助、美濃の体丹、さぬき京極家の家老と

いふ人はさしく尋来るところ 松前の山崎のいとことて岡
本右仲ともいふ人尋来〻〻岳崎の 名村進八も来り会
せてかたる〻〻漆器老人今枝栄蔵きたり〻〻言倫
来
廿一日 半仙来りわかるきとて、其の年山陽寺の来〻〻豊
彦来.
二十二日〻〻座に庭の進善となす薦屋山平 菅香
太郎（義董）旭居堂主人 漆器老人（御上春琴） 小
田南豊 中山言倫〻〻周蔵、西七、画右衛門すべて廿人
世話は河南義平と北の山来りたる者 竹洞 豊彦

高知堂製

玉堂等也
二十三日今枝栄顕が招に赴くゝ清水平八とおなじ
ねゝ畑氏を訪ひしゝ西々店まで行きゝ小石玄瑞
を訪ひしゝ今枝に帰りて会す
廿四日鳩居堂が展観に行くゝ横山桜麻来るゝゝ
南堂言倫江戸人一幼年館す
廿五日小石玄瑞来
廿六日三宅又太郎来るゝ美濃の伏丹俊験来るゝ
周蔵竹内に行くゝ藤善と同じく清風亭の招に赴く
清水平八尊きゆく

高知堂製

廿七日義董来りゝ南豊ゝ古面を持来るゝゝ豊斎
大原とすふ僧ゝゝ招き来るゝゝかの休丹道来り寓す
廿八日小倉庵谷の招に赴く清谷と同くすゝ清水平八
杉岡道辻六蔵等同席すゝゝ藤村萬平ゝゝめぐむ
廿九日乃印譲十印牧周蔵を去ゝ花八ヶ岳峨に行きゝ六
如上人の墓にまふづゝゝ小野維貞藤井斜任が前と
吉岡藤右衛が後家とをたづぬく来りに逢ふゝゝ
京人藤村源八郎、竹岡庄右衛門、同利右衛門等とゝゝ
めぐむ所蔵ゝ記かつ人也鳩居堂たわらや吾右衛門
春樵等きたるゝゝ夜潮商ゝゝめぐむ

九月朔日宇兵衛後家来りけるここ今枝人来り
ここ文蒼上人訪ける阿部良山の母にしめくむここにいよ西
條矢野左文来りここ伴丹蔵と蔵りここ慈戒房来
りし五十年前三浦祐蔵ここに来るここ良斎の墓に
とふら北里村氏に告別して帰る
二日南天丈旭堂来りかかる今枝蕃とおくる
畑柳泉送別の詩賦る扇面小華山題ふ
三日淳蔵来りて升屋蕃右衛門ここ旭荘ここめぐむ
ここ岩観見出来る
四日吉倫東涯の書ここ寺とめぐむ

五日漆谷吉倫を訪ふ
六日登ここ虎人来るここ彼人飛驒より来りここ備
前の仁科北方阿波の高橋某来りここ河田某等
ここめぐむ
七日今枝来飲ここ燃斎山人ここ留別す讃岐へゆくと
云
八日今枝ここ迎にきたるここ学問にいたりここ福井丹波
守のもとにゆくここ瀬尾彌兵衛（さつまやといふ町人詩を
よくす）ここ来るここ村上大助ここおくるここ吉倫ここ来りここ
十三日鳩居堂来りここ紫野平治郎来りここ岩槻翁

俳師尾全徹庵絵吾朶小石主瑞ともらひ榮顯氏
にいたる紫野法岩ついて見へ……
十四日似月次郎八主倫名村進八おきたる、、村上左右
おろをもやひ、、齋藤小華 江戸の白河邸田内生税
加和文二枚を持し来る福井を江似来る
十五日御尾佛吾朶来る 餘登僧無錦珠洲乗光
寺住持とりも来て、、會者紫野平八 畑柳壽柳
迷春樵 中山言倫 浦上春琴 清水平八 小田南畝 画
師米洋 今村学顕 大坂原嶋昔右衛門 武内確斎
、、来る、、名村進八きたる

高知堂製

廿二日譲似直にと、、餅をもらふ、、
廿三日名村進八、、遠山、、大雲寺及び春日の座
太郎を訪ひ別所有俊豊長を訪ひねて紫野
平八の寓所にいたる 紫野は栗山先生の從
子、現に阿州の文学也、、法岩詩あり、、使座義
菫南来とたづね、、吉田意専来る、、栗基
錦竹菴……の桃柳云々
十七日南豊言倫と、、今枝越太川南升座主人来り
送る、、やしみにつきまた大坂の舟にうつる、、大坂に
着蔵の屋敷にやとる

十八日篠崎を訪ふ、、碓嶺を訪ひて、、篠崎来り
、、武内来り、、碓嶺竹邨来る竹邨も篠崎か友也
、、吉田某来る
十九日留守の間竜蔵諸子さゝはきの片岡楓村来り
訪ひ言備来りて、、木津に夢浮安亭とて麦飯の店あ
りむかし子昂千秋なと稀年に来り宴せしこと
あり、、紀国屋市平しめく正黄山は嘉商の隠居
おし、、表貝師盛肉某来り
廿日伊原言馨来同しく碓嶺か招に赴く篠崎竹
渓原田嘉平来る、、越智文平来る尾藤久生の弟

子にて儒者也、、言備来りわかる
廿一日文平子息を来らしむ、、小田と同しく良山とた
つね、、村上立卿をとふ、、宗屋次兵衛にゐる豪
三也、、其家蔵書を読み写をしる、、
廿二日泉屋の嗣子、、来り、、阿部豊之竹小田南部
と同しく芳水楼云々、、
廿三日金毘羅の多門院主巻物の瓶脩をたづね織
子か父也、、篠武二子竹渓蔵屋敷に暇乞し、、、
尾崎にゐる、、雨の宿にゐる
廿四日、、大蔵省につく、、竹中衛府、、肉へ来れと

りぬゝし辞して別にやとる
廿五日竹中によきる画師東伯来るゝし寺内乾斎
とりふ人追ひ来りてゝし高橋真斎追ひ来りゝゝし
伊谷三好逢ぬゝゝし高橋恕助ゝし来るゝし御著（ゴチャク）に
つく
廿六日菅野悩定を訪ぬゝし有年に宿す
廿七日ゝし烏城又太夫に逢ふ備中の故人也ゝし一書
を作る立平匡蔵にのこすゝし定五郎ととはん
とてゝし岡山にてハ直ちに中嶋の逆旅に行きて宿

廿八日周蔵先帰る烏庄とよふ下ふ下し姫井益武
元立平とたつねゝし蘭洲学主に逢ふ小斎藤に
飲し小坂大之介立平来り会す豊後人田陸
村正蔵がゝしを示すゝし薬師院に宿す院主嶋勝
叢ゝしめぐ己ゝし矢掛石井氏に着く
廿九日神辺より僕丁二人来りむかへ薦に家に
かへるゝし

右丁巳四月十四日抄

源高信

橘園集 刊本

備中　小寺清先

雑部

澄月上人に初て逢ける時まで久しく歌によませけん事を問はれければ

祐為将主笹の屋を訪らひはしとやられける頃曲肱亭の庭に手つから萩を植ゑて云々

神無月のはじめつかた菅茶山翁の家を訪ひて

言の葉の栄る宿に冬来てもまさる色あかぬ庭の紅葉に

返し

10 高知堂製

茶山翁の芳野のつとに桜の木にて造れるさか
つきをおくられけるに
神無月の末つかた茶山翁の茅屋を訪ひて山
は皆落葉しぬれと馴て見し一本の松のかけそ
かはらぬとありければ
長月中はの頃蔬をつとあて茶山翁を訪ひ道のく
にて手折つる薄菊萱にそへて出しける云々其
後茶山翁よりおくられける旋頭歌花すゝき
見しうれしさの穂に出るも別れてはます〻菊
萱のおもひみたるゝ

茶山翁の幼き頃母刀自にそひ寝して枕上の屏
風に画かける柳梅とそれこれと教へられし二字の
忘れかたくて齢七十あまり四年の冬其かくを
かゝせてかいつけられし二くさの歌を見て申遣
しける
蘭藤政信か母とじの高齢を壽して
頼翁千祺か我歌を得て珍蔵するよしいひお
こせられければ
清之か蒔蔵の泉の根芹をつとに持帰りけれ
は

高知堂製

安房の国に住る吾児定徹か許へ文遣しけるに
久しく報書の来らさりけれは
長門国豊浦山上宮神主鳴瀬宣喜の訪れけ
るに古のことゝもかたらひて
おなし国千崎とかいふ所の上田利正の鳴瀬と伴
ひ国に帰り又の年再来なんとありけるに
道光上人の出雲へ帰らるゝ別を惜みて
土佐の国人柳瀬何かし袖貝をつとにして
笹の屋を訪ひ侍しか暫く帰られけるに
二月の初つかた廉之か眼の病によりて常に

遊子を送るとて
廉之か伴へる宮泰立須磨の浦の梅にそへて
云々とありけれは
渡辺綱敏亭をはしめ夢に見つるによりて訪
来つとて云々とて和歌を示されけれは
清水何かしのみまかりけるに
若き比より親しく友としける関友政信の身まか
りぬれは云々
相識れる人の年ころになく成ぬるに久頼春水
翁のみうせけるを聞て

松岡渾成翁の古稀を祝ふとて
澄月上人みまかりて後其庵のあたりを過て
よゝ
拙腐翁の三回忌に櫛書遺言といふことを
同冬懐旧 七回忌
祐為縣主の身まかられて後手つから植られし松
萩を見て
おもしめし杖何し世に寒さを防ぎてやとて
贈られける物をとうて
五月雨の比吾児願之かなりし 昔吾よみ歌及

高知堂製

文集をとらひて五巻となし置るを見て
三村何かしの六十の賀に鶯花契萬春
藤井高久の七十の賀の屏風に磯の松原に千
鳥のむれてたつゝる
栗崖氏の母とし百歳の賀に壽老人画賛
北條氏より予か七十を壽くかうた贈られ
けるかへしむくいそ
葉山翁吉野の花見に都へ出られけるまみやひ
をすまし帰りかりつる紀州にて
外嶋三宅翁之か狸の皮を贈りるた

寛政より四年のちまり二とせおも月三日の祖白

玉くと得くある

積美大河村孝婦篤歌並短歌 孝婦名萬

本郡大河村民嘉平妻吾郷津山庄金次之

女事姑孝謹 有司具状以聞寛政九歳丁

巳五月蒙賞賚

遊三原里作歌

詠高嶋歌並短歌高嶋 距神嶋南五百歩隷

神嶋

右丁巳四月一日抄

高知堂製

蕉堂詩稿 東遊鷄肋 文政九十丙戌丁亥 横山廉次郎藏

寫本

東遊鷄肋序

⋯⋯典客高龍君⋯⋯

文政歳次丁亥冬十一月中浣 山室惟俊拜題

東行詩稿

俊曰七言起句第二及五言毎句第二、七言毎第四等孤平。

私心以為不可不改也。

藤井道中 七絶

晨渡吉居川 七絶

至崖村　七絶
宿四日市　七律
信恬曰。
桑名舟中　七絶
将至二川驛値雨　七絶
天竜川　七絶
九月十三夜滞宿金谷驛、同敷木河本澤井、
塚本鈴川賞月于大學寺、得明字　七律

恬曰。
府中曉發　七絶　次月蕎花

恬曰。王阮亭空山開遍白芝花。輸此詩一著。
富士河　七絶
箱關　七律
恬曰。南郭有張嶺雪車轉岩下電、據衣烟亂嶺頭雲
句。可以追及。
途中作　七絶
偶成七絶
君恩是重一身輕。応命不知途險平。篠水函山談
笑過。只愁霖雨屢留程。
恬曰。
曉立楓橋、韻冬、応教賦　七律

川岡、澤三子來訪、席上次韻、岡玄亭見示
作 七絶
公襲職初就藩、示教恭賦二十韻、奉呈下
執事 五古
弱齡新襲職。就国鎮薇城。、、、候寒十二月。途遠
二千程、、、
送閑君曹長陪駕之藩 七古
、、惟月孟冬十九日。叙公途就薇陽城。、、傳指才是
二旬過。日侍玉堂叨寵榮。作者自道。、、喬梓命從國幹
槙。、、、

冬朝限韻、仙賀亭宿題 七律二
十二月十日雪、七絶二
同十二日雪天訪同僚席上作 七絶
同望雪、尚直、亭懐森嶋子 七絶
歳晩作 七絶二
元旦 七律一 七絶一
椒酒香中曙色新。坐迎文政第十春。一从一嘯思
千里。爺渝六旬懐五旬。
早春偶成 七絶一
観梅、花亭課題 七絶一

六日雪、芳二赴築地邨途中作　七絶三

九日赴高輪薩州邸途中作　七律一

花亭先生席上分得韻先　五律一

田家春望、柳灣課題、岩槻道中所見　七律二

石香亭席上探題早起分得韻陽　五律

家嚴大人六十壽言謹賦七排十韻　七言排律

清勤磨鐵事三世。。。家有姉妻陪膝前。。。

吟社早春、岡本席上探題分韻　七律一

新荘観梅分韻各賦　七絶二

二月十一日陪花亭訪容衆坊席上分得韻蕭　七絶一

訪小自在亭席上分韻　七絶一

春雨吟、花亭集課題　七律一

容衆坊席上探題　七絶一

上巳偶成

憶家郷　五絶一

花時遍游諸郊村、千賀亭宿題　七絶三

月下看花、墨田川長明寺拙題　七絶

花亭先生寄詩示東山看花期次韻奉謝

三月廿二日同牧唯助、澤良安、訪金輪寺、

分得韻青　七律

酴醾、詩聖堂　七律

蓴菜、五山堂　七律一

四月十一日渡辺氏招飲芸園中躑躅花次韻

仁齋先生之作　七絶

初夏樓上飲、月岡氏席上作分得韻微　七

律

初夏林亭、石香亭分得韻支

10 高知堂製

雨中新樹、五山堂席上分得韻元　七律

東行詩稿終

九月四日妄閲於平安寓居。是日天陰氣慘。披味尊

什。頓覚頭風愈也。

嘉永甲寅閏七月再閲妄加圏於頭上。門田隣拜還。

右丁巳四月十五日抄

書牘一通

江戸ヨリ新年ヲ賀スル書ヲ得テ福山ニアリニ巻ヘクんモノ

ト労シ

三月廿八日

横山貴一郎様 行在

右精ヨリ右弘マデ

横山一之助様 行萬

右字ヨリ右桓マデ

南院左仲

こゝろ 南院左仲（花押）

高知堂製

蘆堤遺稿 備後松岡懿文徳著 活字本 鶴吉樓蔵

序

翁學主洛閩、ゝゝ尤邃易理、ゝゝ少年ゝゝ出郷、西遊肥薩、東至江戸、ゝゝゝ之遊州城、其足跡殆周天下、ゝゝ往年余在郷、ゝ翁时年方六十、ゝゝ蓋距今十七年耳、而ゝゝ墓草已宿焉、ゝ翁博通衆藝、鼓琴吹笛、而至倍所謂尺八者、為海内屈指之一云、ゝゝ明治二十五年十月下浣、志年友五十川渊撰

濱野穆軒云々

其為詩也、祇余之先人學矣、……七在……東極奥
羽、西到于峙陽、……平素最悪泮更、……明治
二十五年十二月門田重鄰撰
所好之古文、則專在乎先秦、……古道人
另一冊
村星次韻早聞國手
六月朔日夕訪近藤氏席上卒賦
五月十七日同井口谷本二詞盟及弟子亭登
對潮樓
贈緑筠　画師

門人　濱野知　校
姉尾良

蘆堤松岡先生墓碣銘

明治十九年六月二十二日備後蘆堤松岡先生歿於家。……先生諱唯懿。字文德。号蘆堤。幼名字兵次郎。称退藏。松岡氏。考諱重則。称保左衛門。妣桑田氏。先生其第二子。文化十二年二月十五日生于備後國市村。幼從游於小寺廉之。後學於藤井暮庵。尤深易學。既而歴游于関左。凡十有餘年。安政中帰省其郷里。會其父罹篤疾。

未幾歿。母兄病羸。其嗣子亦幼沖。ヽヽ先生ヽヽ
經紀家事。遂復其舊。後付家於其嗣子。開
私塾于福井市。ヽヽヽ又好漫游。西極肥筑。東迨
奥羽。足迹殆遍海内。ヽヽ喜博綜衆藝。吹簫鼓
琴。皆極其奥。其在京師。嘗從近藤宗悦。傳
其秘典。受日本指南所印可。ヽヽ又善狂歌。所
著詩集若干巻。狂歌集二巻。雜著數十巻。
皆存於家。歿年七十二。窆于邑之沼田前山
先塋之次。乃使弟謙藏三子眞之助。繼其家。

右丁巳四月二日抄

高知堂製